# 職場新聞『きずな』が告発

## 健康破壊の熱中症

### 四山鉱で続発、抜本対策を

五月十一日午後二時三十分ごろ、四山鉱本層西六十卸西四片払排気坑道で、クーラー移設作業中の電気工が熱中症で倒れ、担送されました。

また、四月二十四日、上層西三十五卸西九片で開発常一番の労働者がバック掘りの作業中に倒れて担送され、二十七日には同じ三十五卸で、二番方の労働者が材料降ろしの作業中に倒れて担送されています。

このように熱中症が続発している四山鉱の坑内現場は、三十度から三十三度という現場が多く、部分的には三十四度、三十七度という現場さえあります。

これから夏場に向かいますが、現場の温度を下げて作業環境を改善しなければ、熱中症で倒れたり、熱疲労のため欠勤しなければならない労働者が増えることは明らかです。

（一分会職場新聞『きずな』九十八号、五月二十四日発行から）

× ×

夏場に向けての高温対策については、中央生産会議、鉱生産会議などで追及しましたが、会社側はクーラーの増設などの計画を示したものの十分ではありません。交代休憩や作業量についてのチェックが必要であり、職場から改善要求を突きつけよう。

また、ぶっ倒れるまで働かないことがなによりも重要です。

## 連絡もせずに発破

### 違反かくしの姿勢が問題

五月十四日、四山鉱上層西三十五卸西九片と上添連絡坑道の貫通口で、作業中の労働者に連絡もせずに発破するというショッキングなことが起こりました。

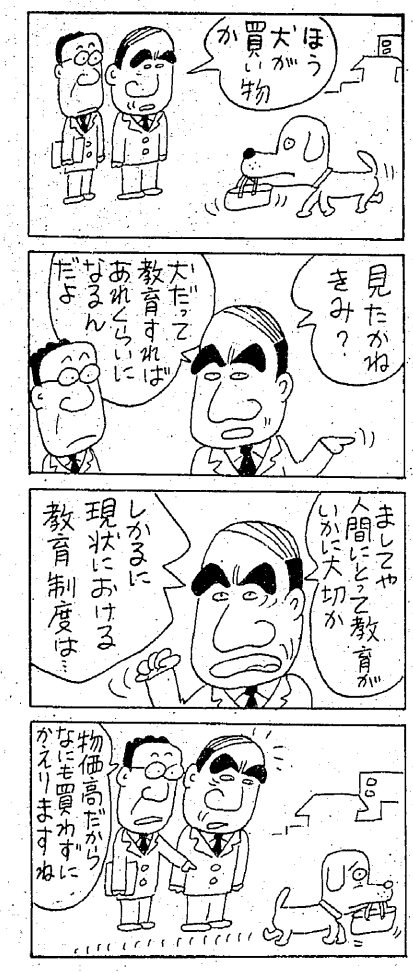
巡回中の上席係員にただすと、「連絡もなしにマイトをうつはずはない」「山鳴りだろう」と強弁。あとで関係労働者が「マイトをうったではないか」と追及すると、その上席係員と実際にマイトをうった当の係員が、口うらを合わせたように「小割りマイトをうった」と、小さな声で言う。違反かくしもはなはだしいが、まったくバカにした言いぐさです。

昇坑後、係長にも真相を明らかにするよう抗議しましたが、明快なこたえはありません。

十八日の保安会で発破のさいの連絡ミス二件（実際には三件）について係長が報告しましたが「係員への徹底した教育しかない」のこと。係員の連絡ミスも許されないが、ミスも起こり得ることを考慮に入れた作業上の対策が必要ではないでしょうか。

## あほーだら

芝岡ゆ友衛




## 保安

今年一月発生した有明鉱坑内火災が、人々に与えたショックはあまりにも大きかった。あの災害いらい、関係方面から保安の改善要請がなされた結果、一部改善されたとはいえ、まだこれからどんな事態が発生するかわからないという不安がだれの胸中にもありはしないだろうか。

「抵抗なくして安全なし」「安全なくして労働なし」をモットーに、三池労組の保安担当者が発行している『保安だより』も、一九八二年二月に第一号が発行されてから今年の五月で二十七号をかぞえ、保安を守るうえで一定の役割りを果たしてきているが、その『保安だより』の第一号に、「保安無視、百害あって一利なし」の標語があったが、まさに一度大災害を起こせば大切な生命が奪われ、何億という金と、社会的な信用を失ってしまう。また、その後に、その損失を取りもどすための合理化という〝ツケ〟がまわってくるのだから二重、三重にも被害が大きくなる。

重大災害が起こる前ぶれとして事故やケガが増えてくる。その裏には運搬作業は息つく暇もなく、電気や機械の撤去、据え付けがものすごく忙がしくなっている。切羽近くでは毎日のように「ヒヤリ」事故やケガ人が出る。つもりつもって重大災害という可能性も大きくなっているのではないか。

### 保安と生産は車の両輪か

保安委員　黒田勝儀

一方、規則・規程や災害対策が現場で生かされないから、事故やケガがたえないと日常茶飯事に言われて重大視されるが、その中身は、人員不足で作業量が増えてくると、人間ひとりの仕事量にも限界がきて、つい手抜きしてつぎの作業へ移る。その方が楽だし、作業能率も上がる。また、金にもなるということが〝生かされない〟〝守られない〟につながってはいないか。いつかはその無理が表面化してくるのは明らかである。

従って私たちは〝災害の歴史を繰り返さないこと〟を肝に銘じて問題解決にあたらなければ生命の保障と炭鉱の将来も守り抜くことはできないだろう。

×

この欄はどなたでも投稿できます。保安についての提言、意見、感想、現場での事実などをお寄せ下さい。匿名でも結構です。字数は六百字から七百字ぐらいです。

＊　＊

## なかま

### 十一分会　平田節子さん

▼…少なくなった坑外職場の人員の中で、さらに少ない女性の身で、三池労組員として頑張っている平田節子さんは、昭和二十一年一月二十四日の入社。

▼…三川鉱で、外雑、選炭場などを経て、現在の職場（仕上げ）で働いている。外雑では主に三川鉱の正門前から柵内にいたる広い範囲の清掃を受け持っていた。トイレ掃除の時など、泉水の水を汲み出して、はだしで仕事をしていたそうで、今では到底考えられないことも…。

▼…激しかった三池闘争の中では、三川支部でもっぱら組合員とオルグさん達への炊き出しで頑張った。厳しいたたかいの中での楽しかったことや、就労後の安い賃金で生活が苦しかったことなど、次つぎとなつかしそうに語る。

▼…四年前に自分の家を持ったが、休日にはわずかな空地を利用した畑で花を作り、仏壇の花を欠かさない。ただ一つの楽しみは、仕事で疲れた体をいやすためのビール。そして自分の声が外に聞こえないかとまわりを気にしながら、テレビの歌謡番組みに合わせて歌うこと。

▼…体は少さいが、姐さん肌で、職場の後輩を叱る。職場では〝私が大将〟の感があるが「節ちゃん」「節ちゃん」と人望がある。その節ちゃんは「いまの職場は人も少なくなったのに人の悪口を言ったり、ちょっとしたことでいがみ合うことも多い。もっと明るく、楽しくできないものか」と、苦言する。

（椛島敬三・記）

平田節子さんは、荒尾市岱洋区14班の自宅でお1人住いです。

## 職場からの春闘総括

### カベが厚く内部が弱い？

炭労の八四春闘は、四月二十三日、一方百八十二円の低額で妥結しました。

妥結の判断は、「ストに突入しても長期化することになり、解決の見通しがつかない」ということで、今後の問題としては「内部体制を強化する」となっています。

職場では、「資本のカベが厚いからといってストもうてないのはおかしいのではないか」「昨年の低額回答の二の舞いは絶対にしない。地下産業にふさわしい労働条件をかちとるといっていたが〝建て前〟だけに終っている」「全炭鉱と要求の〝すり合わせ〟をしたことが結果的にはスト突入さえできなかったのではないか」「有明鉱の災害があったから賃上げを辛抱しなければならないとは思わない」など、不満の声ばかりです。

このような状況を繰り返していれば、たたかっても同じではないのか。会社の景気が良い時でないと賃金は上がらないし、会社あっての労働者だという考え方になってしまうし、高い組合費を払っているのがばからしいということになりはしないだろうか。

資本のカベは厚いし、内部の力が強い方ではないということは、初めからわかっていたことです。

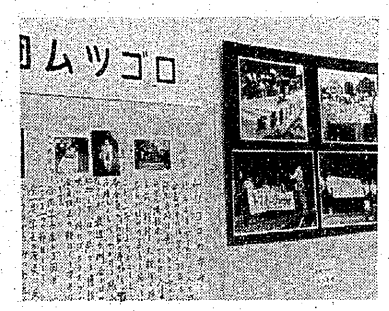
このような中で、春闘をたたかうためにどう内部体制を高めたのか、全体の力を結集して抵抗しようとしたのかが問われなければなりません。

問われなければならないのは執行部であり、分会の役員であり、組合員一人ひとりです。三池のたたかいは『大衆闘争』を基盤にしているからです。

（この項十五分会職場新聞『いのち』三百二十九号、五月十五日号から）

## 「北摂守る会」から交流に来組

毎年交流に来られている北摂（大阪）守る会から、有明鉱災害後の来組に続いて五月二十六日、十人の会員が見えられ、地域での民泊交流に入りました。

## 有明地区合同写真展に米本、待鳥さん

有明地区合同写真展（5月24日～27日、労働福祉会館）に『写団ムツゴロウ』の米本隆義さん（1分会）、待鳥英勝さん（2分会）が出品されました。